

ワカサギ、シラウオの調査

(宍道湖有用水産動物モニタリング調査事業)

石田健次 福井克也

1. 研究目的

宍道湖における重要水産資源であるワカサギ・シラウオの資源動態を調査し、資源の維持・増大を図るための基礎資料を収集する。

2. 研究方法

(1) 産卵状況調査

ワカサギについては、平成 29 年 3 月に斐伊川河口から約 1.2km 上流までの 12 点と、河口沖合の 5 点でエクスマンバージ採泥器（採泥面積 0.02 m²）を用い、また 1 月～5 月には玉湯川河口から約 100m 上流の間で計 13 回スミスマッキンタイヤ採泥器（0.05 m²）を使用してワカサギ卵を採集した。

シラウオについては、平成 28 年 4 月、5 月、翌年 1 月から 3 月の間に宍道湖内 13 点で月 1 回、スミスマッキンタイヤ採泥器によりシラウオ卵を採集した。

(2) 分布状況調査

平成 28 年 4 月、5 月に宍道湖 14 点、大橋川 1 点において沿岸部を調査船かしまを用いて稚魚ネット曳き、平成 28 年 6 月から翌年 1 月まで宍道湖岸 11 点において人力による引網、沖合 10 点では調査船ごずを用いた中層トロール網による調査を行った。

(3) 漁獲動向及び生物測定

宍道湖漁協から定置網漁獲記録（ます網、小袋網）の漁獲状況について聞き取りを行った。また、ワカサギについてはます網で採捕された個体の一部を、シラウオについては分布調査で得られた個体を測定した。

3. 研究結果

(1) 産卵の状況（巻末の資料参照）

斐伊川でのワカサギ調査は例年 2 月に行うが水位が高い状況が続いたため 3 月 14 日に行った。ワカサギ卵は斐伊川右岸河口部 1 地点で 2 個が確認されたのみで、昨年 の 27 個を大きく下回っ

た。玉湯川ではワカサギ卵は採集されなかった。

シラウオについては、産卵は 1 月～5 月（盛期 2 月～4 月）、産卵数は秋鹿沖合（北岸）、来待沿岸と沖合（南岸）、玉湯沿岸（南岸）、大橋川で多く、斐川沿岸と沖合（西岸）では極僅かであった。産卵数は 27 年とほぼ同程度であった。

(2) 稚魚の分布状況（巻末の資料参照）

ワカサギについては、いずれの調査においても採捕されなかった。

シラウオについては、4 月に湖内全域で 398 尾（5～16 mm）の仔魚が採捕され、7 割が南岸で採捕された。5 月は全域で 41 尾（7～20 mm）が採捕されたが、4 月に比べて 1/10 の採捕数であった。6 月～8 月は沖合より沿岸で多く稚魚が採捕されたが、9 月以降は逆に沖合で多く採捕があった。以上から、シラウオは 8 月頃まで湖内全域の沿岸が主な生息場で、それ以降は成長に伴い沖合へ移動・分散すると考えられた。成長は 27 年と同じく、6 月～9 月に鈍り（平均体長 25.8 mm～37.9 mm）、その後急成長し、12 月には体長 80 mm 前後となった。

(3) 今年度の漁獲

ワカサギについては、29 年 1 月 20 日から 2 月 20 日までの期間、ます網で 7 尾が漁獲された。一部の個体測定を行ったところ、体長は 68 mm～104 mm であった。

シラウオについては、11 月の解禁後から散発的な漁獲に留まり、平成 28 年漁期の定置網漁獲記録（ます網、小袋網）によれば、前年漁獲量の約 2 倍の 455 kg であった。漁解禁から 1 月までに採捕したシラウオの体長は 58～90 mm で、前年をやや下回った。

4. 研究成果

得られた結果は、宍道湖漁協のます網組合の役員会および総会、また当センターの宍道湖・中海・神西湖調査研究報告会で報告した。